

都道府県・ 指定都市番号	35	都道府県・ 指定都市名	山口県	研究課題番号・校種名	2(5)校種間連携
				領域名	校種間(小中)連携
研究課題	学校全体で取り組む研究課題 (5)校種間の連携による教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 学校名 (園児・児童・ 生徒数)	しゅうなんしりつかのしょうがっこう ・周南市立鹿野小学校 (92人) しゅうなんしりつかのちゅうがっこう ・周南市立鹿野中学校 (64人)			学校・地域の特色及び実態等 ・中学校区内1小学校の中山間地域 ・児童生徒の9年間を見通した、継続した育みの必要性	
所在地(電話番号)	周南市立鹿野小学校 〒745-0302 山口県周南市大字鹿野上 3045 番地 電話 0834-68-2288 Fax 0834-68-2304 email kanosho@shunan.ed.jp 周南市立鹿野中学校 〒745-0302 山口県周南市大字鹿野上 3061 番地 電話 0834-68-2289 Fax 0834-68-2401 email kanochu@shunan.ed.jp				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.shunan.ed.jp/kanochu/				
研究のキーワード	学びの礎づくり 系統的な9年間のカリキュラム編成 言語活動の充実 鹿野っ子ノート(家庭学習と授業とをリンクしたノートの工夫) 学習ルールの確立				
研究結果のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習内容の系統性を教師が示すことで、児童生徒が既習事項とのつながりや9年間の見通しを意識できるようになり、より主体的に学ぶようになった。 ○ 説明し合うことを軸とした授業で、児童生徒が積極的に意見交換をするようになり、多様な価値観に触れる中で思考・判断し、自ら学ぶ姿勢が見られるようになった。 ○ 授業の振り返りで見つけた疑問点等を「鹿野っ子ノート」でさらに学ぶことにより学習内容の理解につながった。また、その疑問点を次の授業に反映させる等連続性をもたせる工夫をすることで、本時から次時へのつながりを意識し、主体的に学ぼうとする児童生徒が増えた。 				

1 研究主題等

(1) 研究主題

校種間連携(小中連携)を軸とした、言語活動を充実させる教育の実践
 ～児童生徒が授業で「わかる・できる」を実感できる学びの礎づくり～

(2) 研究主題設定の理由

鹿野小・中学校は、鹿野地区の唯一の小中学校で、児童生徒の9年間を見通した系統性のある学びの充実を図るために、小中合同研修会や学校行事の合同開催等、小中連携教育を意識した活動に取り組んできた。児童生徒の関わりは連続的で、中一ギャップに見られる不安や戸惑いは少ない。しかし、児童生徒の既習事項の定着率の低さ、家庭学習が習慣化されていないことに起因する既習内容の定着不足等の学力面での課題に加え、授業で友達と関わりながら学ぼうとする主体性・協働意識が弱いというコミュニケーション力の課題が明らかとなった。それらを受けて、小学校と中学校の教員が協働し、児童生徒の9年間の系統的・継続的な学びの充実を図るために、「学びの礎づくり」を研究の視点とし、「9年間の系統的な指導計画づくり」「説明し合うこと(対話的な活動)を軸とした学習指導の工夫」「授業と家庭学習をつなぐノート指導の工夫」の三つを、小中で連携して研究することとした。

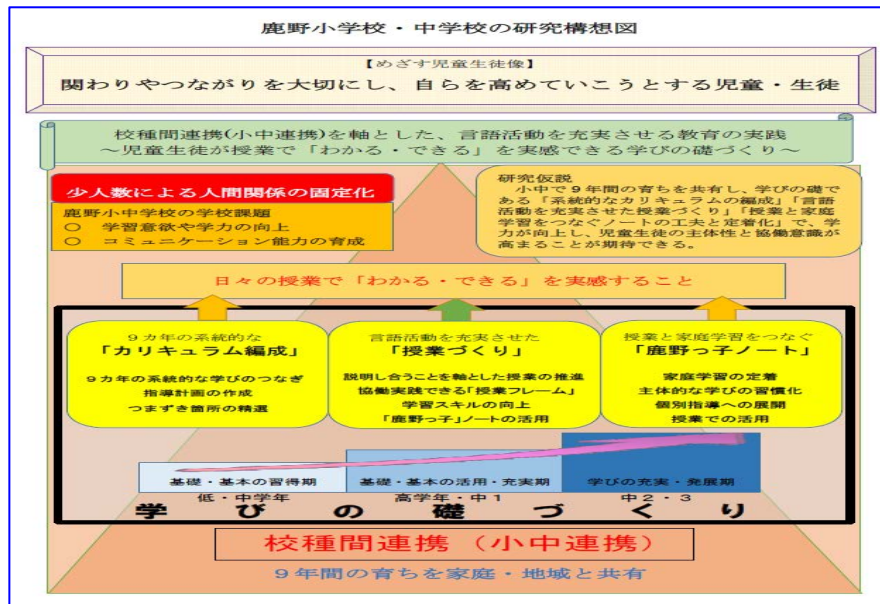
(3) 研究体制

図1は、研究体制図である。今年度は、学びの礎づくりの3つの部会にデータ部会を加えた4つの部会の研究組織体制を整えた。

(4) 2年間の主な取組

企画会議では、重点取組事項に関する企画・提案を、小中合同研修会では、企画・提案に対する協議、授業研究、研究協議を、そしてさらに4部会に分かれて、基本的に毎月実践・評価を繰り返した。

図1 【研究体制図】



2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容(「学びの礎」づくりの3視点)

○【カリキュラム編成】9年間の系統的な指導計画づくり

児童生徒がつまずきやすい単元や領域を認識するために9年間の系統的な指導計画を作成し、言語活動を重視した授業研究や授業実践に生かす。

○【授業づくり】説明し合うことを軸とした学習指導の工夫

学習内容の定着を図るために、「説明し合う」活動の学習指導の在り方について、研究授業や互見授業、乗り入れ授業等を通して明らかにする。その際、「授業フレーム」を小中協働で作成し、その活用と更新を通してさらなる授業改善を目指す。

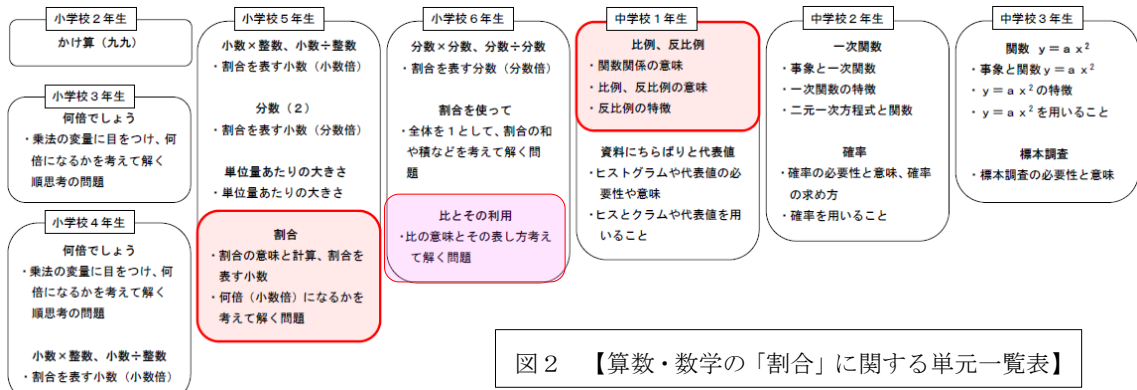
○【鹿野っ子ノート】授業と家庭学習をつなぐノート指導の工夫

学習内容を確実に定着させていくために、授業で使用するノートと家庭で自主学習として使用するノートを見直し、「鹿野っ子ノート」として9年間を見通した指導方法を研究する。

(2) 具体的な研究活動

○【カリキュラム編成】9年間の系統的な指導計画づくり

研究指定を受けた1年目に「言語活動の9年間の指導計画」を作成した。それをもとに、「説明し合う」活動場面を意識し、各教科の「言語活動を意識した9年間の指導計画」を作成した。2年目は、指導計画と指導内容に加え、それぞれの教科(国語、数学、社会、理科、英語)において、つまずきやすい単元について整理し、9年間の関連性をまとめた。これにより、児童生徒が、どの学年のどの単元でつまずいているのかを系統的に把握することができた。(図2)これをもとに小中教員が共に指導方法等を協議し、第5学年の「単位量あたりの大きさ」「割合」、第6学年の「比例と反比例」の学習時には、小学校の担任と中学校の数学科教員によるTT授業を行った。



○ 【授業づくり】説明し合うことを軸とした学習指導の工夫

研究指定1年目は、9年間の言語活動を充実させるために、小中連携して授業フレームを考え、説明し合うこと(対話的な活動)を軸とした学習指導を工夫・実践した。

2年目は、「授業フレーム」に工夫を加えた。具体的には、①課題との出会い、②説明し合う活動、③学びをつなげるまために加え、④児童生徒が「わかる・できる」を実感しノート活用へつなげる意識をもたせる工夫をした。この流れを、鹿野小中学校が共通で使用している「説明し合うこと」を軸とした板書型指導案で具現化することを目指した。

○ 【鹿野っ子ノート】授業と家庭学習をつなぐノート指導の工夫

「鹿野っ子ノート」の目的は、小中が協働して授業と家庭学習のノートを共有していくことで、9年間の児童生徒の学びをつなげることである。授業の学びと家庭の学びをつなげることで、児童生徒が主体的な学習習慣を身につけることができると考えた。疑問点やキーワード等を書き出す欄を設け、授業ノートをもとに家庭学習を行い、学力向上を目指した。図3は中学校英語科のノートである。どこが、どのようによいかのわかるように図で示し、児童生徒に紹介した一例である。

図3 【中学校英語科のノート】

基本英文と本文などの量により、レイアウトは微調整される。

本文解説。上下の空白部分に詳細な情報が書き込まれている。

新出語句。

「めあて」がまとめである。

基本練習

「まとめ」となる基本英文の復習

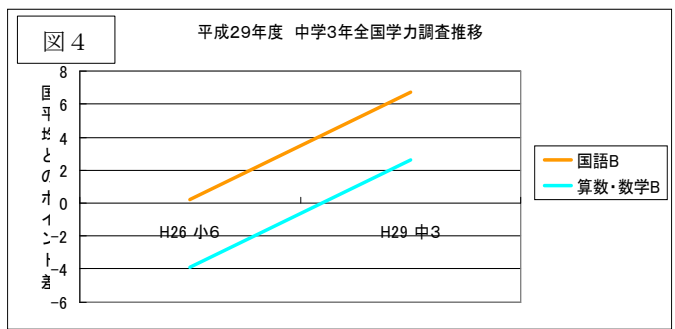
「ふりかえり」。授業と家庭学習をつなぐ内容を自らふり返る。

鹿野っ子ノートの取組は、学校だよりやホームページ、ビデオ等で家庭・地域にも紹介している。学校と家庭・地域が連携し、児童生徒の学習意欲の向上と家庭学習習慣の定着につなげている。

3 研究の成果と課題 (○成果 ●課題)

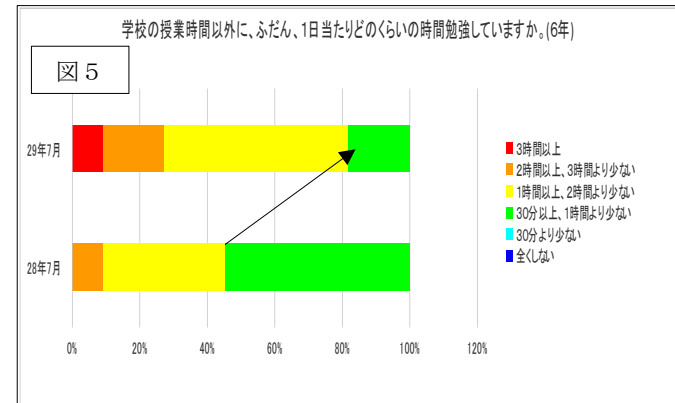
○全国学力・学習状況調査の結果から

図4は、全国学力・学習状況調査で国語Bと算数・数学Bの国平均と鹿野小・中学校の平均との差を比較し、児童生徒のポイントの経年変化をグラフ化したものである。小学校6年時の数値と現在の中学校3年時の数値を比較すると顕著に向上している。これは、「説明し合うこと」を軸とした授業改善の成果の一つと考える。



○児童生徒へのアンケート集計結果から

図5は、現在の小学校6年生が学校の授業時間以外に1日当たりどれだけ学習しているかを調べたものである。5年生の時に比べ、1時間以上家庭学習をしている児童が30%以上増えていることがわかる。授業と家庭学習のつながりをもたせたノート指導の成果の一つと考える。



ことがわかる。授業と家庭学習のつながりをもたせたノート指導の成果の一つと考える。

○ 9年間の発達段階や教科の特性に応じた「授業フレーム」は、教職員の異動があっても、「鹿野小・鹿野中学校の授業づくり」として継続可能な取組である。

● 「授業フレーム」の振り返りの場面で、児童生徒に何を振り返らせるのかという視点が明確でなかったため、「学習が楽しかった。」という感想に留まる傾向がみられた。

● 「鹿野っ子ノート」は、9年間の発達段階や教科の特性を踏まえ、児童生徒が自己の成長を実感できるよう、記述内容の質をどう高めていくかが課題である。

4 今後の取組

○【カリキュラム編成】9年間の系統的な指導計画づくり

今年度作成したカリキュラム表を「つまずきやすい単元」に焦点化し、小中の系統性を踏まえながら授業を工夫し、つまずきの改善を図る。新学習指導要領で示された資質・能力の3つの柱を軸に、小・中学校全ての教科等で系統性をみることもつなげる。

○【授業づくり】説明し合うことを軸とした学習指導の工夫

振り返りの場面での視点を小・中学校が系統立てて考え、教職員の授業改善と児童生徒の学びの質の向上を図る。また、今後つまずきやすい単元に焦点をあてた計画的な授業研究とともに、日常的な互見授業の活性化に努めていきたい。少人数のために固定化されつつある人間関係においても、対話的で深い学びの実現につながる説明し合う活動を探究していく。

○【鹿野っ子ノート】授業と家庭学習をつなぐノート指導の工夫

児童生徒間や教員間のノート交流により、自己の成長を実感できるノート指導の継続を図る。また、ノート展やノートコンクールを定期的で開催し、保護者にも「わかる」、保護者も学校と「協働できる」よう啓発に努める。